

通信 i・ストリーム（法人版）VOL.52



文：小川 康成
ファイナンシャル・プランナー

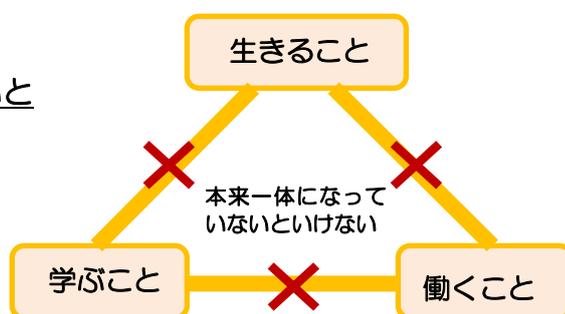
円安が止まらず円ドルの為替が1ドル150円を突破し大きな話題となっています。1ドル150円というと1986(昭和61年)から1987(昭和62年)あたりの円ドルレートで、約35年前のバブル経済の入り口頃の水準にまで戻ってきました。私自身は、バブル経済は経験していませんが、当時を知っている先輩方が遠い目をして懐かしそうに語っている姿を覚えています。原材料高など輸入に関しては高騰となりますが、円安は輸出関連での優位性が出るのが基本で、長期的に見た経済構造変化の入口??参考にバブル経済を研究するのが良いかも知れませんね。

周期的な環境変化に惑わされない、本当の教育とは

先日、名古屋大学名誉教授（現：花園大学教授）の上田健男先生の講演を聞いてきました。

暮らしの中で「生きること」「働くこと」「学ぶこと」がそれぞれ分断されており、これらは本来一体になっていないと意味をなさないという事でした。

確かに考えてみれば、それぞれの主な活動の場になる「家庭」「職場」「学校」が、各個人の人生において独立（分断）しており、それぞれの立場で一個人の人的成長を促す環境としての連携は昔と比べて弱くなった気がします。



叱られる事のない子供たち

採用の現場で大学教授が、企業経営者に「私たちは教育現場で、就職する彼らを叱ってきませんでした。ですので、彼らは就職してから初めて叱られる経験をする事になると思います。申し訳ありません」と話し、その経営者は啞然としたそうです。

社会に出れば、当然わからない事が増えたり仕事の失敗もしますが、失敗すれば叱られるのも当たり前ですが、その経験のない子供たちを教育現場ではなく、会社である職場が教育を行うのか??と疑問に思ったそうです。

家庭では、「モラハラ」問題や「褒めて育てる」事がもてはやされているし、学校でも親からのクレームを恐れて、人を育てる視点での「叱る」事が難しい、職場では「パワハラ」を恐れて上司が部下を「叱る」事や指示を出すのもおっかなびっくりになっているのが現状です。

これでは、本人のために厳しい事も言うという行為が、社会全体で放棄されている状態ではないでしょうか?『本当に不幸なのは誰なのでしょう?』

反省や成長の機会の少ない子供・学生・新社会人こそが、被害者のような気がします。



刹那的な学生にいかに関心事の楽しさを伝えるか?

大学教授が、東海地方有数の国立大学の学生に学ぶ事の楽しさや意味を伝えようと尽力されていた時、全ての学生ではないですが、あまりに無気力な学生達と話す機会があり問いかけると、「僕たちは難関大学に入学するため、今までやりたい事も我慢して必死に勉強して入学したが、社会に出たらまた面白くない仕事を一生してゆくことになる。大学生活の4年間だけが唯一好きなことができる時間なので、レポートや講義はきちんとやるのでそれ以上は放っておいてください」と答えたそうです。大学時代が唯一のモラトリアム期間とはなんとも切ない考え方です。

「学習権」や「勤労の義務」を持ち出すまでもなく、働くことも学ぶことも人が生きる上でごく自然に必要な事であり、それが面白くない苦行であるならば人生は味気ないものです。

映画「学校」に本当の教育を語る場面が

山田洋二監督の映画「学校」（1993年・松竹）に本当の教育の姿が表現されていると上田教授は考えています。

映画「学校」は、夜間学校を舞台に国籍や年齢も超えた人々が、生い立ちや環境など、問題を抱えながら、よりよい「人間らしい生き方」とは何かを考え、それを目指して「学ぶ」。その学びの中からやがて生徒たちは、それぞれの「幸せ」というものが見えてくる。彼らにとって「生きる事」は働く事と結びついており、働く事の中で「学ぶ」事の意味や喜びを実感しているのです。



前ページにある「大学入学が人生のゴール」とも言わんばかりの大学生の発言との差異の大きさを、手段が目的に置き換わってしまった。いびつな姿を見た気がします。

一体、彼らは何のために学んできたのでしょうか？

「ヒト」は生まれながらに人であるわけではなく、親や社会に育てられることでやがて集団生活の中で本来の人としての能力を発揮できる人間になる。

狼に育てられた子供は最後まで2足歩行ができなかったそうです。（アマラとカマラ）

“生まれついて持っているはずの能力も、その能力を育む環境が無ければ一生発揮出来る事はない” のです。

考えて、気づき、成長する為には行動し、反省し、次に生かす。このようなPDCA循環が必要です。いかに個々の従業員の「考えて、行動し、失敗し、反省し、次に生かす」という機会と環境を用意できるのか？ 個々の経営者の腕の見せどころなのでしょう。



教育の目的とは？ 会社での教育とは？

教育の目的

教育基本法第1条によれば、「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」とされています。つまり、教育とは「人格の完成」が目的で人格が完成されると、人間として供えられた能力を発揮し、自主的精神ですべての物事に取り組む、責任感あふれる勤勉な人間になるという事でしょうか。

要求した「解」をいかに効率よく導き出すか？いかに難関の学校に入るのか？は、本来の教育の目的には全く関係ない事で、偏った教育の弊害は私が語るまでもなく、社会全体の人々が感じている事ではないでしょうか。

また、経営層の抱える悩みに多く見られる。「社員の自主性がない」「言われないとやらない、やれない」等は、教育の目的がしっかり達成されていない状態とも言え、その責任は社会全体で覆うべきものであり、親・教師・経営者などそれぞれの環境における教育の責任主体が取り組んでゆく課題なのでしょう。



反面、言われたことは素直に行い、性格的にもあまりギスギスした子は少なくなったと感じています。いずれにしても子を見れば親が判るように、社員を見れば社長の能力もわかる。という面があるので経営者自らが社員の「人格の完成」に責任をもって取り組むべき事柄なのでしょう。